

『万葉集』から見る日本の古典 ⑥

獨協大学特任教授 城崎 陽子



聖徳太子誕生の地とされる橘寺(奈良県高市郡明日香村)

聖徳太子

その1

先回まで二回にわたって『万葉集』の磐姫皇后歌を取り上げ、夫・仁徳天皇に対する愛情深い歌表現を読む一方で、『古事記』や『日本書紀』に語られる嫉妬深い人物としての磐姫皇后像の差異を読み解いた。今回は聖徳太子を取り上げ、その人物造形から生みだされる伝承を探ってみよう。

聖徳太子は用明天皇の第二皇子として生まれた。まずは、生誕にまつわるエピソードを『日本書紀』からみてみよう。

橘豊日天皇の第二子なり。母の皇后は、穴穂部間人皇女と曰す。皇后、懐妊禁中を巡幸りまして諸司を監察たまふ馬官に至りたまひて、乃ち厩の戸に當りて、勞みたまはずして忽に産みませり。生れながらに能く言ひ、

聖智有り。壯に及びりて、一に十人の訴を聞きて、失たず能く弁へたまひ、兼ねて未然を知らしめず。且、内教を高麗の僧慧慈に習ひ、外典を博士党舒に学び、並に悉に達りたまひぬ。父の天皇、愛みて、宮の南の上殿に居らしめたまふ。故、其の名を称へて、上宮厩戸豊聡耳太子と謂す。

『日本書紀』推古天皇即位前紀に載る当該の記事は、聖徳太子の生誕の様子や、その優れた才能を記す部分である。「厩の戸」で「勞みたまはずして忽に産」まれたとか、生まれながらに「聖智」があり、長ずるに及んで、一度に十人の人の訴

えを聞き別けたといった著名なエピソードが並ぶ。そして最後に、父・用明天皇が、この皇子の才能を愛して「宮の南の上殿」に住ませたという聖徳太子の名の由来によぶ。天皇の居所となる宮の南のしかも小高い場所に皇子を住ませることは、天皇が特別にこの皇子を愛しんだことを意味している。「上宮厩戸豊聡耳太子」という呼称はこうしたエピソードを象徴する名前だ。昨今、歴史教科書で、「聖徳太子」の名称を止めて別の名称にしようという動きがあるが、いかがなものか。本稿では混乱を避けるために「聖徳太子」を用いる。

さて、本稿で注目すべきは、聖徳太子の事跡をたどることももちろんだが、『万葉集』に載せられた次の歌が、様々な伝承を付随させることにあるだろう。まずは『万葉集』の歌をみてみよう。

挽歌

上宮聖徳皇子、竹原井に出遊でましし時に、龍田山の死人を見悲傷して作らず歌一首「小墾田宮に天の下治めたまひし天皇の代。小墾田宮に天の下治めたまひしは豊御食炊屋姫天皇なり。諱は額田、諡は推古」

(巻三・四一五番歌)

『万葉集』巻三は、巻二に次ぐ巻として位置づけられる。題詞冒頭に「上宮聖徳皇子」とあるのは聖徳太子を指す。「竹原井」は大府府柏原市高井田にあった清泉を指している。『続日本紀』養老元年(七二七)二月、「竹原頓宮」に元正天皇の行幸のあったことがみえるから、その前史として、聖徳太子の時代にはこの清泉への遊覧に出かけることがあったということ

であろう。「龍田山」は奈良県生駒郡三郷町立野の龍田本宮の西方の山を指し、大和と河内の国境をなす山である。聖徳太子は、この龍田山を越えて竹原井に出かけようとしたとき、道に行き倒れている「死人」を見て、当該の歌を作ったのだ。なお、「」の中に入っている文章は第三十三代推古天皇の宮や和風諡号である「豊御食炊屋姫天皇」、漢風諡号である「推古」を注記したものである。

次に、歌をみてみよう。歌本文の第一句「家ならば」は「家にあらば」と同じで、「我が家であったら」くらいの意味である。第二句の「妹」は肉親に限らず、親しい相手(女性)を指す。この「妹」は「旅人」とは「手まかむ」(腕枕をする意)間柄であるから、「妻」と考えてよからう。末句「あはれ」は感嘆詞だ。歌の意味は「我が家であった

ら愛しい妻に腕枕で横たわるところだが、旅先であるので、道に倒れ伏している、この旅人よ嗚呼!」となる。題詞によれば、聖徳太子は亡くなっていた「旅人」の姿を見て、心を傷ませ、歌を詠ったというのである。

『万葉集』では、旅の途中で命を落とした者や自殺や事故死等、異常な死を迎えた者に歌を詠ったという事情をもつ作品は多い。それは、そうした死を迎えざるを得なかった者の魂を鎮めるために詠われる歌でもあるのだ。聖徳太子が詠った歌は『鎮魂歌』の系譜に連なるものである。ところで、この歌の詠われた状況に異伝が存在するのである。さて、その異伝とは…



高尾山の昆虫

ウスバカミキリ



盛夏の高尾山のケール畑から参道には、多数の甲虫が灯火に舞い、道に落ちていたりします。その中で一際数が多いのがシロスジカミキリやヒゲナガカミキリ、ミヤマカミキリと並ぶ大型種のウスバカミキリです。

大アゴはクワガタのように前に伸び、メスは産卵管が露出している等、原始的なカミキリであることが窺えます。

なかなか立派なカミキリだと思いますが、暗褐色で地味な体色、スマートさに欠ける触角、そしてその名のように上翅が薄く柔らかい等全体的に見た目が悪いためか、子供たちにも人気がありません。

近縁種で離島に産するトゲウスバカミキリは明るい黄褐色の体色と希少性でマニアに人気があり、外国産のウスバの仲間には世界最大種がいたりして華やかなの事を考えると、ちよつと気の毒ですね。基本的に夜行性の種ですが昼間でもよく目にし、多種の木の枯死部や半枯れの衰弱木、伐採木等に潜んでいて、不人気でも林業の害虫ではないと擁護してあげたい気持ちになります。

(撮影・文松島 孝)